

アダム・スミスにおける宗教論に関する一考察

——重商主義政策との関連において——

山口 正 春

- 一 はじめに
- 二 グラスゴウ大学の学問的・宗教的雰囲気
- 三 アダム・スミスの宗教観
- 四 独占機構としてのローマ教会
- 五 近世初頭の植民地建設の動機
- 六 むすびにかえて

一 はじめに

アダム・スミスが誕生し活躍した一八世紀という時代は、経済史的には、どのような時代であつたのだろうか。一口に言うと、この時代、スペインの栄光はオランダの独立と共に地に落ち、それに代つてイギリスとフランスの絶対王制が官僚制と軍備を拡充し、重商主義政策によつて植民地を拡大し、強固な支配と豪華な文化を生み出したのである。換言すれば封建体制から資本主義体制への転換が起りつつあつた時代であつた。イギリスとフランスは世界の二大強国として君臨し、搾取、強制、略奪の対象である植民地の争奪をめぐつて、六〇年間にわたつて戦争に明け暮れ、一七六〇年代にイギリスに産業革命が起つたとはいえ、一七七五年には北米植民地の独立戦争が始まり、一七八九年にフランス革命が頂点に達するという、まさに騒然とした時代であつた。

そして忘れてはならない重要なことは、当時、宗教つまり既存のキリスト教、教会権力のもつ影響力は、まだまだ相当に強かつたことである。つまり民衆の生活に対する教会の支配は依然として、強固であつた。一例を挙げれば、スミスにとつて同郷の親友であり、畏敬すべき先達であつたデビット・ヒュームが、アンシャン・レジーム末期のパリ社交界では「哲学者中の王様」^①として、あれほど歓待されたのに、その彼が死を目の当たりにして『自然宗教に関する対話』の自らの手による公刊を断念せざるをえなかつたのは、友人を巻き添えにするトラブルへの危惧の念によるものかも知れない。事実、無神論者として疑われていたヒュームの宗教論の出版は激しい非難を巻き起こすであろうと思われたので、彼の友人たちは、その出版に反対した。スミスでさえも、ヒュームの依頼を引き受けるのに、ためらいを感じたらしい。^②ヒュームもそれを推察して、一七七六年五月三日にロンドンからの手紙で、次のよう

に書いた。

「小生の『自然宗教に関する対話』を出版しようという貴下の御申出についても十分熟考いたしましたところ、この著述の性格と貴下の御立場との双方のため、その出版を急ぐのは不適當のように考えるに至りました。それゆえ小生はこの機会をとらえ、かの友情深き御申出に権限を賦与しようと思います。すなわち、かの一文をいつ出版するか、あるいはそもそもこれを出版するか否かについて、小生はすべて貴下の一存にお任せすることに満足いたします。」⁽³⁾

このような宗教的な抑圧の強かった状況の下で、スミスはその思想家・哲学者としての目を天界の崇高な事柄ではなく、人間の世俗的な事柄に向ける姿勢を鮮明に打ち出すことによって、既存のキリスト教思想・哲学ではなく、基本的には新しい世俗的な思想・哲学の立場を採用したことは注視されてよからう。

そもそも一八世紀という時代は、思想的に言えば、啓蒙思想の時代と呼ばれ、封建的諸特権に対する理性の抵抗の時代であった。だからその時代はまた、超自然的なものに対する信仰やキリストの復活や奇跡に対する疑心と反発の時代であり、総じて中世を支配してきた教会権力に対する人間的反抗であり、また国家公認の、政治と癒着した教会に対する批判の時代であった。⁽⁴⁾ スミスも時代の子である。『国富論』におけるスミスの教会権力、就中、ローマ・カトリック教会（以下、ローマ教会と言う）のもつ権力への批判は鋭く且つ苛烈を極めているのであるが、とりわけ経済政策としての重商主義政策を背後で操ったのは、ローマ教会という一大権力の独占機構であると彼は痛烈に批判する。教会権力という独占機構によって多数の人々が抑圧され、幸福が犠牲になり、一部少数の特定の人間のみが利益を享受している。

同様の状況は多かれ少なかれ、政治権力と癒着したスコットランドの教会においても見られた。知識人も含めて大

勢の人々が宗教的抑圧の下にあり、人間の真の意味の幸福が犠牲になっている状況が続いていた。啓蒙思想家スミスは、こうした教会の非人間的抑圧を黙視できなかった。この様な国内外の教会権力と封建的諸特権を打破しなければならぬ。スミスはまさに近代化のための闘士であったことは想起されてよい。

小論では、スミスの著作に現れた宗教論について考察するが、先ずスミスが学んだ当時のグラスゴウ大学の学問的・宗教的雰囲気、スミスの宗教観に最も強い影響を及ぼし、スコットランド教会の長老派聖職者たちと対立していた恩師フランシス・ハチスンの新思想(理神論)などを明らかにし、次に中世以来の支配者ローマ教会の権力が人民を抑圧し、絶対王制・王室と癒着しながら独占体制をつくり上げつつ、教会人と王室が黄金欲に取りつかれ、植民地の原住民に弾圧と殺戮を繰り返し、一体となって金・銀を飽くことなく追求する重金主義に始まる重商主義政策を強引に推し進め、植民地貿易の自然的な好影響を如何に破壊してきたか、更に既存のスコットランド教会及びローマ教会の実態を踏えつつ、スミスが自らの宗教観に基づき、人間の幸福の真の在り方とはどのようなものだと考えていたか、こうした点をスミスの著作に内在しながら、紙幅の許すかぎり検討してみたい。

(1) John Rae, *Life of Adam Smith, with an Introduction "Guide to John Rae's Life of Adam Smith" by Jacob Viner, 1977, P.196.* ジョン・レー『アダム・スミス伝』(大内兵衛・大内節子訳)、岩波書店、昭和四七年、二四二頁。

(2) スミスがオックスフォードのベリオール・カレッジに留学した際、次のような出来事があったことを想起すべきである。「この学園〔ベリオール・カレッジ引用者〕には彼〔スミス引用者〕に禁じられた果実が一つだけあった。近代合理主義の成果がそれであった。それについて、次のような話がある。……ある日のこと彼はヒュームの『人生論』を読んでいた。恐らくそれはハチスンの勧めによって著者が彼に贈呈したあの本であったろう。それが見つかって、彼は厳重な譴責処分に付

せられ、その本は悪書として没収されたというのである。当時のオックスフォードを支配していた暗黒の精神についてわれわれが知るところからすれば、グラスゴウの教授から直接渡された近代思想の大著を学生たる者が読むなどということは、とくに悪質な違反行為であるとされたのも、まず当然のことと言えよう。むしろスミスがこの位のことです許されたほうが意外である。現にこれより数年前には、三人の学生が理神論をかじったかどでオックスフォードから放校されたことがあった。」(John Rae, *op.cit.*, P.24. 邦訳、二九—三〇頁。)

(3) *Ibid.*, P.297. 邦訳、三七—頁。

(4) 大河内一男『アダム・スミス』(『人類の知的遺産』④)、講談社、昭和五四年、四—三頁。

二 グラスゴウ大学の学問的・宗教的雰囲気

スミスがグラスゴウ大学に入学したのは、一七三七年で彼が一四歳のときであった。当時のグラスゴウ大学は、王国最高の大学の一つであったし、宗教的偏見からは比較的自由で活気に満ちていた。それは、一七〇七年にイングリッドに合邦されたスコットランドが急激な経済発展と、それに伴う文化運動高揚の手掛かりをつかみつつある時代を反映していたからである。⁽¹⁾当時のスコットランドはイングランドに比べて産業は遅れ、織物工業はイングランドから大きな打撃を受けたりもしたが、次第に近代化が進み、亜麻産業が育成され、アメリカに最も近い港として、グラスゴウがアメリカ貿易に利用されるなどのために前途が開けていった。その経済的・文化的な活動に知的な面でグラスゴウが果たした役割は、小さくなかった。「グラスゴウは古い秩序が新しい秩序に、それも主として商業的貴族社会の優勢に基づいている秩序に道をゆずった都市」⁽²⁾であった。

近代化が進みつつある新興都市グラスゴウの知的中核の場としてのグラスゴウ大学はスコットランドの、否、イギリス全体の新しい学問・新思想の中心であり、この大学には学問研究の分野で高い評価を得ていた研究者たちが相当活躍していたことは記憶されてよいだろう。しかしスミスに最も影響を与えたのは、何といっても、流暢な言い回しのできる稀な才能、思想の新鮮さ、そして学生たちの心をしっかりとつかむ、その真摯な態度を合わせ持っている力強い魅力的な指導者ハチスンであった。⁽³⁾ハチスンは当時、道徳哲学の教鞭を執っていたが、自由潑刺たる雄弁と創造性をもつて大学内に知的自由を横溢させ、スミスの学問への関心を高め、晩年、スミスに「忘れえぬハチスン」と言わしめたほどである。⁽⁴⁾

ハチスンが学生に人気があった理由の一つには、当時としては、大学で初めて旧習を破って母国語(英語)で講義をしたのみならず、同僚のギリシャ語教師アレグサンダー・ダンロップと共に、古典研究を復興したことであろう。勿論、それだけではない。ハチスンは、三代目シャフツベリ伯を創始者とする道徳感学派の代表者であり、「スコットランド哲学の父」と呼ばれ、且つ「イギリス功利主義という強力な学派の創始者の一人」でもあったので、⁽⁵⁾ハチスは大学外の長老派聖職者たちからは危険と思われる新しい思想を教えていた。

具体的に言えば、人間には元来何が善いかを探究させ、それを明らかにさせうる「道徳感」という感情が与えられており、また「最大多数に最大幸福をもたらす行為が最善のもの」という、当時の神こそ神聖にして最善のものという、考えを真つ向から否定する考えを呈示したのである。つまり神秘的な神の奇跡を信じることより、人類の幸福のために生きることこそ神の意思だという新しい思想を主張したのである。そして神は、神秘的な印によって知られるのではなく、人類の幸福のために存在するのだと考えていたハチスンの宗教的樂觀主義は、彼の先輩ガーシヨム・

カーマイケルの厳格なピューリタニズムとは対照的であつた。⁽⁶⁾⁽⁷⁾ こうしたことは、一方で進取の気性をもった学生たちに深い感銘を与えたが、他方で当時のスコットランド教会の長老派聖職者たちにとっては許すことのできないことであつた。当時は、民衆の生活に対する教会の支配は依然として強固であり、一七三六年まで魔女狩りが公然と行われていた時期である。

このような教会の統制下、スミスが入学した年には、教会の長老派聖職者たちは、ハチスンの講義がウェストミンスター信仰告白に反すると糾弾した。彼らは、ハチスンが道德的善の基準を他人の幸福の促進に置き、また善悪に関する知識が、神に関する知識にかかわりなく得られるとする点で、危険思想を宣伝していると激しく攻撃したが、ハチスンを支持する若い世代は、情熱的な激しさをもって、学外の旧勢力を圧倒した。入学したばかりのスミスが、学生の手ハチスン擁護運動に指導的役割を演じたとは言えないだろうが、新しい思想の到来を告げる明星としてのハチスンの姿は、少年スミスの心にはつきりと焼き付けられたであろう。⁽⁸⁾ それ以前に神学の教師ジョン・シムソンも教会の最高宗教会議によつて異端者と見なされ、牧師職と教職とを共に停止すべきことを命ぜられたが、大学は敢然とこれを拒否した。そしてジェームズ・ワットが蒸気機関を発明したのも、全くこうした進歩的な大学の保護の下に、初めて可能だったのである。⁽⁹⁾

では自由で進歩的な、活気に満ちた大学において、新しい思想の指導者ハチスンから最も強い影響を受けたスミスにあつては、どのような宗教観が生まれてくるであろうか。次にそれを見よう。

(1) 田添京二「合邦とスコットランド・ナショナルリズム」(『欧州経済学史の群像』白桃書房、一九九五年、所収)、一二五―

一四二頁を参照。

- (2) R.H.Campbell & A.S.Skinner, *Adam Smith*, 1982, P.62. R・H・キャンベル & A・S・スキナー『アダム・スミス伝』（久保芳和訳）、東洋経済新報社、昭和五九年、七二頁。
- (3) W.L.Taylor, *Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith*, 1965, P.14. W・L・テラー『ハチスン・ヒューム・スミス…経済学の源流』（山口正春・川又祐訳）、三恵社、二〇〇七年、一二頁。
- (4) 内田義彦『経済学史講義』、未来社、一九九五年、一二三頁。
- (5) 水田洋『アダム・スミス研究』、未来社、一九七五年、四八頁。
- (6) 同書、四九頁。
- (7) John Rae, *op.cit.*, P.12. 邦訳、一五頁。
- (8) 水田洋、前掲書、四七頁。
- (9) グラスゴウで開業を許されなかった若いワットがグラスゴウ大学の実験室に部屋を与えられたのは、一七五八年、ニューコメンのエンジンの修理を頼まれたのは、一七六三年で、スミスがグラスゴウ大学で中心的な存在であった頃のことである。そのワットの発明に理論的な指導をしたのはスミスの親友で潜熱の研究をしていたジョーセフ・ブラックであった。（内田義彦、前掲書、一一九頁。）

三 アダム・スミスの宗教観

スミスは勿論、無神論者ではなかった。その証拠に「スミスは一七五一年一月一六日に正式に教授に就任することが許され、その際、彼の能力を正式に示すものとして「思想の起源について」(De Origine Idearum) という論文を発表し、ウェストミンスター信仰告白に正式に署名した」⁽¹⁾ 事実が挙げられる。しかし彼はキリスト教徒ではなかった

し、その態度はむしろ反キリスト教的・反教會的であつた。キリスト教の教える神について彼自らの信仰を示す章句は、彼において殆ど見当たらない。ハーストはこのことに関して、次のように言っている。すなわち『『道德感情論』やその他の著述中には、スミスが友人ヒュームやアリストテレスの著述よりは一層積極的な確固たる信念を有する有神論者であつたことを示す章句は、殆どないようである』⁽²⁾と。

それどころか、「彼はグラスゴウ大学に就任したとき、講義のはじめにお祈りをするのをやめさせてもらいたいと当局に願ひ出たが、当局はこの要求を許さなかつた」とか、「彼の開講の祈りは非常に自然宗教のにおいが強い」とか言う噂話があつたくらいである。また「大学の礼拝堂で神の儀式が行われている間、彼が自席で公然と微笑しているのが見られたと言うことである」⁽³⁾。こうした記述からスミスは、既存のキリスト教に反抗的態度をとっていることが明らかである。

だが彼は神の宇宙の創造を信じていた。このスミスの神観は一般に、理神論とか自然宗教とか言われているが、理神論は神による天地創造と最後の審判を認め、神そのものは否定しないが、それ以外の日常生活においては神や教会を必要としない、いわば冷ややかな理性的宗教である。⁽⁴⁾この点、ラファエルは次のように述べている。すなわち「スミスは、恐らく理神論者であつたのだろう。彼は他の多くの啓蒙思想家と同じく、觀察しうる自然こそ神の存在を信じるに足る理由を提供するものであると考えた。自然の過程についてのスミスの説明は、神学からの何らの支援も必要としない、自称の科学的企てとして読むことができる」⁽⁵⁾と。『道德感情論』や『国富論』に見られる「神聖な設計者」「偉大な技師」「宇宙の管理者」「全知の存在」「自然の創造者」などの用語は、すべてこのような創造主としての神を意味していた。スミスは言う。「宇宙のすべての住民が、最も偉大なものと同様に最もつまらぬものも、あ

の偉大で慈愛深く全知の存在の、直接の配慮と保護のもとにある。⁽⁶⁾

このスミス自身の立場は、恐らくニュートンの立場から影響を受けたと思われる。⁽⁷⁾ 新宇宙観で一世を風靡したニュートンから当時の知識人たちは、多大の恩恵を受けたのである。ニュートンを讃えるため、詩人アレキサンダー・ポープは、そのニュートンに捧げる碑文として次のように書いている。

「自然と自然の法則は、夜の闇に隠されていた。神は言い給うた、ニュートンあれと、するとすべては明るくなった。⁽⁸⁾」

ニュートンの出現は、それほどまでに高く評価されたのである。ニュートンの業績、とりわけ天体物理学上の業績は、スミスおよび同時代の多くの知識人に類推の豊かな源泉を提供したという理由でも重要であった。⁽⁹⁾ スミスも含めて多くの知識人にとっては、ニュートンは自然という大宇宙を一つの首尾一貫した体系として提示したように思われた。⁽¹⁰⁾ スミスは、このニュートンの体系を人間社会に類推し、適用したと想像できる。スミスは「人間社会は、われわれがそれを一定の抽象的で哲学的な見方で眺めるときは、その規則的で調和ある運動が無数の快適な効果を生み出す、偉大で巨大な機械のように見える」⁽¹²⁾と述べている。

更に重要なことはスミスにあっては、神は単に宇宙を創っただけではないと言うことである。宇宙に住むものに対して、限らない仁愛を注いでいるのである。彼はこれを普遍的仁愛と名づけているが、恩師ハチソンの影響が窺われるのである。スミスは「宇宙という偉大な体系の管理運営、すなわち、すべての理性的で感受性のある存在の普遍的な幸福についての配慮は、神の業務であって人間の業務ではない。人間に割り当てられているのは、ずっとつまらない部門であるが、しかし彼の諸能力と彼の理解の狭さにははるかに適切なもの、すなわち彼自身の幸福について、彼

の家族、彼の友人たち、彼の国の、幸福についての配慮である¹³」と言っている。だからスミスは、いわゆる「主義の人」が「自分の理想的な統治計画」に従って、「大社会のさまざまな成員」をチェスの駒のように動かそうとすることを非難したのであるし、また各人の利益追求が「見えない手」の導きによって、結果として社会の利益を増進するのだという有名な言葉を述べたのであった。¹⁴

このようにして被造物たる人間は、神の広大な仁愛を信じて、彼はただ自らの幸福や周囲の幸福だけを考えてこれを目指すればよいのであって、そのことがまた、創造主である神の意志にもかとうことなのである。こうして、ここには神と人間との自然的分業が説かれるのであるが、これこそは分業論の経済学者スミスにとって、真に相応しい起点をなすものである。スミスは言う。

「人類の幸福は、他のすべての理性的被造物の幸福と同様に、自然の創造者が彼らを存在させるようになったときに意図した、本来的な目的であつたように思われる。……創造者の無限の諸完成についての抽象的な考察に導かれて、われわれが到達するこの意見は、自然の諸作用の検討によつて、なお一層確認される。それらの作用はすべて、幸福を促進し、悲惨に對して防衛することを意図されているように思われるのである。われわれの道德的諸能力のさしずに応じて行為することによつて、われわれは必然的に、人類の幸福を促進するための最も効果的な手段を追求するのであり、したがつてわれわれは、ある意味では、神的存在に協力して、神慮の計画をわれわれの力の及ぶかぎりおし進めるのだと、言つていいのである」¹⁵

こうしてスミスの理神論は結局、人間の自己中心的幸福の追求が神慮によつて、人類一般の普遍的幸福に結びつくという、極めて樂觀的な調和感へと導かれていくのである。このスミスの宗教的樂觀主義は、先述のように、彼の恩

師「忘れえぬハチスン」からの影響であろう。この点、ジョン・レーは次のように述べている。「彼〔スミス―引用者〕は、―ハチスンのクラスに入って自然神学の講義を聞いたとき、あるいは日曜毎に行われた神学の特別研究のための個人クラスに出席したかしたとき―自分自身の信条としてハチスンの宗教的樂觀主義を採るようになった。そして終生その影響下に立つに至ったのである。」⁽¹⁶⁾「ハチスンは新時代に属していた。それは、導きの手を自然の光のうちに求め、それによって一八世紀の最良にして恵み深き神を発見した時代であった。すなわち神とは、人類の福祉のためにのみ生き給うものであり、神の意志は神秘的な奇跡や摂理から知られるべきものではなくして、人類のより大なる利益―「最大多数の最大幸福」―についての広汎な考察によって知られるべきものだったのである。」⁽¹⁷⁾

いずれにしても、スミスの理神論にあつては、人間の現世での幸福追求活動Ⅱ利己心の発動が神慮によって、人類の現世での幸福に結びつくという、樂觀的態度が顕著に現れている。こうした態度が、『国富論』全体を貫いている「見えざる手」や「予定調和」の思想の根幹に据えられていることが分かる。ジェイコブ・ヴァイナーは、「スミスの見えざる手に象徴される自然的自由の観点の根底には、理神論があつたことを無視してはならない」⁽¹⁸⁾と当を得た言葉を述べている。

- (1) R.H.Campbell & A.S.Skinner, *op. cit.*, P.40. 邦訳、四三頁。
- (2) F.W.ハースト『アダム・スミス』(遊部久蔵訳)、弘文堂、昭和四二年、三九頁。
- (3) 同訳書、四〇頁。
- (4) Cf. A.L.Macfie, *The Individual in Society: Paper on Adam Smith*, 1967, ch.3. A.L.マクフィー『社会における個人』(舟橋喜恵・天羽康夫・水田洋訳)、ミネルヴァ書房、昭和四七年、第三章を参照。

- (5) D・D・ラファエル『アダム・スミスの哲学思考』（久保芳和訳）、雄松堂出版、一九八六年、四一―二頁。
- (6) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D.D.Raphael and A.L.Macfie, Glasgow edition, Oxford, 1976, P.235. (以下、*TMS*と略記する) 水田洋訳『道徳感情論』、筑摩書房、一九八一年、四七〇頁。(以下、邦訳と略記する)
- (7) David A.Reisman, *Adam Smith's Sociological Economics*, 1976, PP.42-3.
- (8) *Ibid*, P.42.
- (9) Ian Simpson Ross, *The Life of Adam Smith*, 1995, PP.98-102. I・S・ロス『アダム・スミス伝』（篠原久・只腰親和・松原慶子訳）、シュプリンガー・フェアラーク東京、二〇〇〇年、一一〇―一二頁。
- (10) R.H.Campbell & A.S.Skinner, *op.cit.*, P.94. 邦訳、一一二頁。
- (11) J.Ralph Lindgren, *The Social Philosophy of Adam Smith*, 1973, PP.4-6.
- (12) *TMS*, P.316. 邦訳、三九九頁。
- (13) *TMS*, P.237. 邦訳、四七二頁。
- (14) 水田洋、前掲書、一八五―一六頁。
- (15) *TMS*, P.166. 邦訳、一二四―一五頁。
- (16) John Rae, *op.cit.*, P.13. 邦訳、一六頁。
- (17) *Ibid*, P.12. 邦訳、一五頁。
- (18) ジェイコブ・ヴァイナー『キリスト教と経済思想』（根岸隆・根岸愛子共訳）、有斐閣、昭和五五年、一〇八頁。

四 独占機構としてのローマ教会

さて今まで論じてきたところから分かるように、中世的教会権力に反抗し批判するために生み出された宗教思想、

啓蒙主義的・合理主義的思考やフランス唯物論が辿り着いた神^①、それが理神論であり自然宗教であった。この意味することは、倫理思想と宗教思想において聖職者の権威とか伝統的な教会の信条からの影響が減少したことであり、また教義、啓示、および来世から理性、感情、およびこの世の幸福に関する考慮へと強調点が移行したことである^②。つまり倫理思想と宗教思想の大規模な「世俗化」が進んだのである。こうした思潮の下に、スミスは啓蒙主義の立場から伝統的神学を放棄したのである。スミスの神は人類の幸福を願い、人類の福祉のために力を尽くす慈愛あふれる存在であり、人類にとって恵み深い神であった。神の意志は、神秘的な神の奇跡や摂理から知られるべきものではなく、人類の大いなる利益、人類の幸福についての広汎な考察によつて知られるべきものであった。スミスの神はそういう神であった。

それでは、啓蒙主義的且つ合理主義的思考が辿り着いた宗教、理神論を信奉するスミス、そして理神論から生まれる人類にとって慈愛あふれる恵み深い神に信頼を置いていたスミスにとって、当時のローマ教会は彼の眼にどのよう映ったのであろうか。一口に言えば、市民政府と人民を抑圧するだけでなく、黄金欲に駆られ王室を先導し、重商主義政策を扇動する一大独占機構として映ったのである。だから彼は、次のようにローマ教会を批判してやまない。「ローマ教会という組織は、政府の権威と安全に対立して、また政府が守つてやれるところではなくては栄えることのできない人類の自由と理性と幸福とに対立して、これまでにつくり上げられた、最も恐るべき結社と見てよからう。この組織の中では、迷信という最も馬鹿げた妄想でさえ、非常に大勢の人たちの私的な利害関係によつて支えられており、人間理性の強襲を受ける、一切の危険を免れるような工夫になっていた^③」と。市民政府を擁護したスミスである。それに対立するものはローマ教会の機構であると言うのだ。これは『国富論』での瑣末な批判ではなく、至る所

で繰り返しローマ教会を非難し、ローマ教会による思想の押し付け、金融の独占、外国貿易の独占、囲い込みなど、そうした一連の政策を指して人類の自由と理性、幸福に対立する一大機構として批判している。

ローマ教会の傲慢、抑圧などの諸悪に関しては、スミスだけではなく、ずっと後にリチャード・ヘンリー・トニーが、その名著『宗教と資本主義の興隆』の中においても史実に基づき指摘している。その一例としてローマ教会が、悪名高い高利貸しなしでは成り立たない組織であったことをトニーは記述している。「当時、最もよく整った行政組織の中心として、ヨーロッパ各地から送られる送金を受けとり、しかも他国の政府が、なお収入としては、人間の奉仕や現物支払いにたよっていたときに、これを貨幣の形で受納していた教皇政治は、高利貸しなしでやっていくことができなかった。……教皇庁は、ある意味では、中世最大の金融機関であり、その財政組織が複雑になるにつれて、事態はよくなるどころか、ますます悪くなる一方であった。一三世紀には細々とした流れにすぎなかった弊害が、一五世紀に奔流となった。しかもローマの悪弊は、ことに悪名高いものであったが、必ずしも中世には珍しいものでもなかった。司祭が商売をやって高利をとるという不平も、ときには聞かれた⁽⁴⁾と。

また囲い込みについて言えば、聖職者や修道院長までもがやっていた。「その土地の貴族や紳士や、その上自他ともに許した聖職者である修道院長までが、国家の為になるところか、とんでもない大きな害悪を及ぼすのもかまわないで、百姓たちの耕作地をとり上げてしまい、牧場としてすつかり囲ってしまいます。家屋は破壊する、町は取り崩す、後にぽつんと残るものはただ教会堂だけという有様、その教会堂も羊小屋にしようという魂胆です⁽⁵⁾」とトマス・モアは『ユートピア』の中で述べている。追記すれば「ドイツにおいては、一揆が最も頻繁におこり、また最も激しかったのは、宗教領主の所有地においてであった。」⁽⁶⁾このように神の名において農民を追いつ出し、囲い込みを続

けてきたのは、ローマ教会という組織であった。まさにローマ教会という組織は、当時最大の富を保有する存在であり、宗教・政治・経済の三位一体的支配者であったのだ。^⑦

ローマ教会の巨大な一大独占機構の実態について、スミス自身は『国富論』の中で、たとえば次のように述べて批判している。スミスの言い分を聞こう。「人間の智と徳の限りを尽くしても、覆すどころか、決して揺がすことすらできなかった、この巨大な堅牢な組織」^⑧とか、「教会の重要な聖職の任命権、すなわち、それを守らんがために、ローマ法王庁が、キリスト教世界で最大の主権者たちの王座のいくつかをしばしば揺がせ、時には覆しました」^⑨とか、あるいは「ヨーロッパの大部分で、ローマ法王は、まず、殆んどすべての司教権と僧院長職の、つまりいわゆる枢機卿会議任命の任命権を、その次には、さまざまのたくらみと口実で各司教管区に属していた下級の聖職の大部分の任命権を、次第に自分の手中に収めてしまった」^⑩などと言ってスミスは批判している。

更にスミスは続けて次のように言っている。すなわち「ヨーロッパ諸国すべての僧侶は、一種の宗教的軍隊としてまとめ上げられ、この軍隊は、いかにもあちこちの部署に散開しているものの、あらゆる移動も作戦も、いまやただ一人の司令官によって命令され、一つの統一的戦略に基づいて指揮されうるに至ったのである。それぞれ特定の国の僧侶は、この軍隊の個々の分遣隊と見なしてもよいわけで、ある分遣隊の作戦は、その国を取り巻く国々に駐屯する他の全分遣隊によって、たやすく支持応援してもらうことができた」^⑪。「僧侶の間の団結は、俗人の領主の間の団結よりも、常にずっと固いものであった。前者は、法王の権威に対する正規の規律と服従のもとに置かれていた」^⑫と。また僧侶の裁判権について、スミスは「それは、彼らのそれぞれの領地なり荘園なりの範囲内では、世俗の大領主の裁判権と同じく、国王の裁判権の権威から独立しており、また、それを排除するものであった」^⑬と言う。

ところで、スミスは『国富論』の中で、ヨーロッパ諸国の経済政策を支配していた重金主義にはじまる重商主義とその帰結たる独占と保護の体制を批判してやまないことは、よく知られている。前述のように『国富論』は全巻あげて、実は極めて周到で体系的な重商主義批判だと言つてよいだろう。そして国富を金・銀・財宝と見なし、貴金属を飽くことなく追求し、植民地を形成せんとする重商主義の一貫した基本政策を背後で押し進める努力をしたのは、最大の独占体であるローマ教会であつたとスミスが考えていることは先に触れた。とりわけ重商主義時代の初期、すなわち重金主義の時代は、ローマ教会の後押しが著しかった。なぜなら、当時のスペイン、ポルトガルの国王は、ローマ教会の宗教政策を担つて、大航海時代に君臨した君主であるからだ。⁽¹⁴⁾したがつて、貴金属を求めての重商主義政策、植民地政策の源流は、ローマ教会という一大独占体に求めることができる。⁽¹⁵⁾

スミスは重商主義の思想が、素朴な重金主義、拝金主義から出発したことを指摘して次のように言及している。スミスの主張に耳を傾けてみよう。「富と貨幣は、要するに日常用語では、あらゆる点で同義と見なされている。富んだ国は、金持ちの場合と同様に、貨幣の豊富な国だと考えられ、どの国も、金銀を山と積み上げることが、国を富ませる最も手早い途だと考えている。」⁽¹⁶⁾「これらの通俗的な見解の結果、ヨーロッパ諸国民は、皆それぞれ自分の国に金銀を蓄積するあらゆる可能な方法を研究してきたのだが、しかし殆んどその効果はなかった。スペインとポルトガルは、金銀をヨーロッパに供給する主な鉱山の所有者だが、両国は、最も厳しい罰則を設けて金銀の輸出を禁じるか、さもなければ、その輸出に高い税金をかけるかしてきた。」⁽¹⁷⁾「アメリカ発見の後しばらくの間、スペイン人が未知の海岸に到着したときに、彼らが最初に発する質問は、いつも決まつて、どこか近くに金か銀の出るところがあるか、と言ふことだつた。その返事次第で、彼らはそこに植民地をつくる価値があるかどうか、あるいは、その国は征服する

だけの価値があるかどうかを、判断したのである。⁽¹⁸⁾」

このように見えてくると、ローマ教会という一大独占体によって後押しされたスペイン、ポルトガルの両国が重商主義政策の名の下で、植民地の建設に着手した動機は、主として黄金欲に駆られたものであったことが分かるのである。この点、次節で敷衍してみよう。

- (1) 大河内一男、前掲書、四一五頁。
- (2) ジェイコブ・ヴァイナー、前掲訳書、七一頁。
- (3) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R.H.Campbell & A.S.Skinner, Glasgow edition, Oxford, 1976, Vol.II, PP.802-3. (以下、WNと略記する。) 大河内一男監訳『国富論』、Ⅲ、中央公論社、一九七六年、一八二頁。(以下、邦訳と略記する。)
- (4) トーニー『宗教と資本主義の興隆：歴史的研究』（出口勇蔵・越智武臣訳）、岩波文庫、上、一九七七年、六五―六頁。
- (5) Thomas More, *Utopia*, edited by George M.Logan & Robert M.Adams (Revised edition) in Cambridge Texts in the History of Political Thought, 2002, P.18. トマス・モア『ユートピア』（平井正穂訳）、岩波文庫、一九九八年、二六―七頁。
- (6) トーニー、前掲訳書、下、一二頁。
- (7) 後藤文利『経済政策の原理：その倫理的基礎』、中央経済社、昭和五六年、九一頁。
- (8) WN, II, P.803. 邦訳、Ⅲ、一八二頁。
- (9) WN, II, P.805. 邦訳、Ⅲ、一八六頁。
- (10) WN, II, P.800. 邦訳、Ⅲ、一七八頁。
- (11) WN, II, P.800. 邦訳、Ⅲ、一七八―九頁。
- (12) WN, II, P.801. 邦訳、Ⅲ、一八〇頁。

- (13) WN, II, P.801. 邦訳、Ⅲ、一七九頁。
- (14) 後藤文利、前掲書、一二三頁。
- (15) 同書、四二頁。
- (16) WN, I, P.429. 邦訳、Ⅱ、七八頁。
- (17) WN, I, P.431. 邦訳、Ⅱ、八〇頁。
- (18) WN, I, P.429. 邦訳、Ⅱ、七八頁。

五 近世初頭の植民地建設の動機

スミスは『国富論』の中で「アメリカの発見と喜望峰を迂回して東インドにいたる航路の発見とは、人類史上に記録された、最も偉大で最も重要な二つの出来事である」⁽¹⁾と述べ、更に続けてスミスは植民地建設の動機について言及している。すなわち、「アメリカや西インド諸島におけるヨーロッパ諸国の植民地の建設は、何ら必要に根ざしたものであるのではない。そして、そこからたらされた効用は著しく大きかったとはいえ、ギリシャやローマの植民地の場合に比べて、それほど明瞭な根拠に立ったものとは言えなかった。その上、この効用は、植民地建設の当初においては理解されてもいなかった。そして植民地建設の動機も、またそれを促した諸発見の動機も、この効用に根ざすものはなかった。この効用の性質、大きさ、および限度などについては、恐らく今日においても十分には理解されていないようである」⁽²⁾と述べている。

他方、ギリシャとローマの植民地についてスミスは次のように言うのである。「母国の都市国家は、植民地を自分

の子孫と見なしており、その上植民地は、絶大な恩恵と援助とを母国から受ける権利を賦与され、それと引き換えに深い感謝と尊敬とを母国に捧げるものだと考えられていたが、しかもそれに対して母国が直接の支配や司法権などを行使しようとはせず、自由な解放された子孫だと考えられていた。それらの植民地は、自らその政治の形態を決め、自分自身で法律を制定し、その施政者を選び、隣国との和戦のことを決定し、一独立国家として、母国の認可ないし承認を求めることを要しなかった。だから、このような植民地の建設を促した利害関係ほど単純で明白なものはない⁽³⁾ろう。」

「ラテン語の「コロニア」(colonia)という言葉は、単に開拓地を意味している。これに反してギリシャ語の「アポイキア」(apoikia)という言葉は、住居の分離、郷里をあとにすること、家郷から出ていくことを意味している⁽⁴⁾」のであって、人口が増加して、それを養うに足る食糧が不足してくると、人口の一部は世界のどこか遠い地方へ出て行ったのである。だからスミスは次のように結論する。「多くの点で、ローマの植民地はギリシャのそれと異なっていたが、しかし植民地の建設を促した動機そのものは、等しく明白単純なものだった。すなわち双方の制度とも、その根源を不可抗的な必要か、さもなければ明瞭な効用に根ざしていた⁽⁵⁾。」

これに対して、近世初頭のポルトガル人、スペイン人の植民は、まったく異質であった。彼らはイベリア半島に食糧増産の余地がなくなったので、イベリアから出て行ったものではなかった。スミスが言うように、「ヴェニス人の巨大な利益が、ポルトガル人の貪欲心を煽ることになった。彼らは、一五世紀を通じて、かつてムーア人がサハラ砂漠を横断して象牙や砂金を持ち帰った国々への海路を発見しようとした⁽⁶⁾」のである。そして彼らはやがて「マデラ諸島、カナリア諸島、アゾールス諸島、ケープ・ドゥ・ヴァード諸島を発見し、ギニア海岸、ロアング海岸、コンゴ海

岸、アンゴラ海岸およびベンゲラ海岸を発見し、そしてついに喜望峰を発見したのである。⁽⁷⁾「二四九七年にヴァスコ・ダ・ガマは四隻の船団を引き連れてリスボン港を出帆し、十一ヶ月の航行の後、インドの海岸に到着した」⁽⁸⁾のである。

一方、「ジェノアの一水先案内人〔コロンブス〕が、西回りで東インドに行き着こうという、一層大胆な計画を立てた。⁽⁹⁾」スミスが言うように、「東回りの道が遠ければ遠いほど西回りは近いはずだ、とコロンブスは正当にも確信した」⁽¹⁰⁾のである。そして「東インドと通商しようとする企画が、たまたま西インドの最初の発見の端緒になった」⁽¹¹⁾とスミスは言う。コロンブスは、一四九二年パロスの港を出帆し、二、三ヶ月の航海の後、小バハマを発見し、その後、サント・ドミンゴ島を発見するに至る。「だが、コロンブスがこの航海やその後何回かの航海で発見した諸地域は、彼が探し求めていた東インドとは全く別のものだった。彼が発見したのは、シナやインドの富や稠密な人口や耕作地ではなく、サント・ドミンゴやその他彼が訪れた新世界のすべての地域は、ただ森林に被われた荒野の未耕地で、儼然な裸の未開部族たち若干がいたにすぎなかった」⁽¹²⁾。

ところで「コロンブスにとっては、自分が発見した諸地域が、たとえどんなところであろうとも、それらが非常に重要なものであることを、スペインの宮廷に対して描き出してみせることが必要だったのだが、国の真の富、すなわち土地の生産物としての動・植物について、コロンブスの説明を正当化しようするようなものは、当時、何一つとして無かったのである。……新たに発見された諸地方の動・植物が非常に有益なものだという説明を正当づけることができなかったので、コロンブスは鉱物資源に眼を向けた。そして、この第三の種類の富の豊富さは、他の二つの資源である動・植物の貧弱さを十分に償って余りあるものと思ひ込んだ。……そこで、サント・ドミンゴは金の豊富な国とし

て描き出され、そのために（現在のみならず、当時における偏見に従って）、この地域は、スペインの国王に対してのみならずスペイン王国にとつても、富の尽きることはない真の源泉だと説明された。¹³」

「コロンプスの説明の結果、カステイリアの枢密院は、自衛力の全然ない原住民の住む諸地域を領有することを決意した。彼らをキリスト教に改宗させるといふ敬虔な目的（傍点―引用者）が、この非道な計画を神聖化した。だが事實は、黄金という財宝を見つけようという欲望が、この企ての唯一の誘因（傍点―引用者）だったのだ。そしてこの動機に一層重みを加えようとして、コロンプスは、そこで発見される金銀の半分は王室に帰属すべきものだとして提案し、枢密院はこれを承認した。¹⁴」更にスミスが言うには、「新世界についての、コロンプス以後のスペイン人のあらゆる企図は、同様な動機によって駆り立てられたように思われる。すなわちオイエダ、ニクエサおよびヴァスコ・ヌニェス・デ・バルモアをダニアン地峡へ駆り立てたのも、コルテスをメキシコへ、アルマグロとピサロとをチリやペルーへ駆り立てたのも、この黄金に對する神聖な渴望（傍点―引用者）にほかならなかった。この種の探検家たちが未知の海外にたどり着いたとき、彼らがいつも最初にする質問は、この辺に金があるか、であった。この点に関する情報如何によつて、彼らはその地を立ち去るか、あるいは、そこに定住するかを決めたのである¹⁵」と。

では、このようにして植民地を獲得したポルトガル、スペインは、上述の植民地経営を通じて、近代国家として繁栄したのであるか。答は否である。莫大な新大陸の貴金属はイベリアに流入した。イスラムの商人やヴェニスの人の手を経ずに、植民地や東洋の特産物は、直接ヨーロッパに入るようになった。しかし、その成果をスミスは、経済的に次のように説明する。「両国「ポルトガルとスペイン」が、まだ、これという程の植民地をもたない頃は、いづれも製造業国であつた。ところが、この両国が、世界における最も豊かで富んだ植民地を領有してからというもの

は、双方の国とも製造業はなくなってしまった。⁽¹⁶⁾更に続けて、「サント・ドミンゴおよびコロンブスが発見した他のすべての地方における原住民がもっていた金が、六年ないし八年の間に、根こそぎ剥ぎ取られてしまうと、それ以上の金を見つけ出すためには、鉱山を採掘しなければならなくなった⁽¹⁷⁾」とスミスは言う。

このような状況が、何故生じたのか。そこにスミスが見た経済的原因是は、独占の弊害であった。「スペインとポルトガルでは、植民地貿易の独占の悪影響が他の諸原因によつて加重され、その結果として、植民地貿易の自然的な好影響を殆んど帳消しにしてしまったように思われる。ここに、他の諸原因と言ったが、それらは種類こそ異なれ、一種の独占だったようである。⁽¹⁸⁾」スミスの見解によれば、ローマ教会という一大独占機構の後押しによつて作られた王室の独占体制、商人の植民地貿易の独占が、イベリアの本国の経済的破滅をもたらしたと言うのである。「重商主義のさまざまな統制は、資本のこの最も自然で有利な配分を、どうしても大なり小なり攪乱することになる⁽¹⁹⁾」とスミスは言うが、その中でも「およそ独占こそ、まことに重商主義にとつての唯一の武器であるように思われる⁽²⁰⁾」として、スペイン、ポルトガルの植民地主義が生み出す統制、とりわけ独占が、本国経済を破滅に追い込んだと考える。

一方、植民地の側に立ってこれを見れば、前述の「二つの出来事」、つまり新大陸の発見とアフリカ南端経由で東洋に至る航路の発見が、これらの植民地にとつては致命的であつたと考える。「東西両インドの原住民たちにとつては、これらの出来事から、本来もたらされるはずの商業上の一切の利益は、これらの事件が引き起こした怖るべき不幸の中に埋没されてしまった⁽²¹⁾」とスミスは述べる。植民地の原住民の強制労働や壊滅に等しい殺戮は、ローマ教会が先導したスペイン人やポルトガル人による植民地主義の暗い一面であるが、その犠牲の上に、スペインとポルトガルにもたらされた莫大な量の貴金属そのものが、両国の経済の衰退の原因なのである。

- (1) WN, II, P.626. 邦訳、II、四〇二頁。
- (2) WN, II, P.528. 邦訳、II、二九一頁。
- (3) WN, II, P.556. 邦訳、II、二八八頁。
- (4) WN, II, P.558. 邦訳、II、二九〇—一頁。
- (5) WN, II, P.558. 邦訳、II、二九一頁。
- (6) WN, II, P.558. 邦訳、II、二九一頁。
- (7) WN, II, P.558. 邦訳、II、二九一—二頁。
- (8) WN, II, P.559. 邦訳、II、二九二頁。
- (9) WN, II, P.559. 邦訳、II、二九二頁。
- (10) WN, II, P.559. 邦訳、II、二九三頁。
- (11) WN, II, P.564. 邦訳、II、三〇〇頁。
- (12) WN, II, P.559. 邦訳、II、二九三頁。
- (13) WN, II, PP.560-1. 邦訳、II、二九四—六頁。
- (14) WN, II, P.561. 邦訳、II、二九六—七頁。
- (15) WN, II, P.562. 邦訳、II、二九七—八頁。
- (16) WN, II, P.609. 邦訳、II、三七六頁。
- (17) WN, II, PP.561-2. 邦訳、II、二九七頁。
- (18) WN, II, P.609. 邦訳、II、三七六頁。
- (19) WN, II, P.630. 邦訳、II、四一〇頁。
- (20) WN, II, P.630. 邦訳、II、四一〇頁。
- (21) WN, II, P.626. 邦訳、II、四〇二頁。

六　むすびにかえて

スミスが指摘したように、ポルトガルとスペインは両国とも、重商主義政策を採る以前は製造業の国であった。だが一大独占体であったローマ教会の後押しによって、貴金属を獲得するため、両国が重金主義にはじまる重商主義政策を遂行していくうちに両国の経済は衰退してしまった。このように見えてくるとスミスにとって、まさに「ローマ教会という機構は、政府の権威と安全に対立して、また、政府が守ってやれるところではなくては栄えることのできない人類の自由と理性と幸福とに対立して、これまでに作り上げられた、最も恐るべき結社」⁽¹⁾であった。ローマ教会は人類の自由と理性、幸福に対立する一大機構であったのだ。ローマ教会という中世的教会権力は、民衆にとってアヘンであった。またローマ教会という一大独占機構の先導のもとに、十字架と鉄砲を担ぎ、重商主義政策を遂行していたスペイン人、ポルトガル人による植民地からの貴金属の略奪、植民地の原住民への弾圧と殺戮などのさまざまな非人道的行為は、スミスにとって言語道断であった。同様のことは、スコットランドの教会についても言えることであつた。スコットランド教会の長老派聖職者は、神こそ神聖で最善のものであるという考えを主張し、神は人類の幸福のために存在するという考えは異端であるとして退けたのであつた。そして民衆の生活に対する教会の支配は依然として強固なものであり、民衆が抑圧され、自由と理性と幸福が犠牲にされてしまっている。

こういう教会権力から民衆を解放しなければならない。スミスにあつては、既存のキリスト教は政治と癒着したキリスト教であり、人々を抑圧し体制維持の道具になっていることを見抜いていたのだ。だからスミスは、神による天地創造と最後の審判とを認め、神そのものは否定しないが、それ以外の日常生活においては神や教会を必要としない

理神論を信奉したのだ。⁽³⁾ また、こうした立場からすれば、何故スミスが当時の大学において一般に教えられていた中世以来の神学に基づいた哲学体系によらないで、古代ギリシャの哲学体系に自らの思想体系の拠り所を求めようとしたか、その意図が明らかになるであろう。すなわち当時の哲学体系では、一切の学問が「神学に従属するもの」⁽⁴⁾としての地位しか与えられず、それは教会中心の封建社会の哲学体系に相応しいが、近代社会の思想体系に相応しくなかった。スミスは次のようにも言っている。すなわち「あらゆる年齢の人々を教化するための施設とは、主に宗教上の教化のためのものである。この教化は、人々を現世でよき市民にすることよりも、来世という、もう一つのより善い世界のために、今から用意させることを目的とする類いのものである」⁽⁵⁾と。教会中心の封建社会の哲学体系を否定したスミスは、古代ギリシャの哲学体系に自らの思想体系の拠り所を求めようとしたが、次の文章は、スミスの意味する哲学の性格をよく示しているであろう。

「個人としてだけでなく、家族の、国家の、さらには人類という一大社会の一員としてみる場合に、人間の幸福と完成とはそもそも何かということが、古代の道德哲学の探究しようとして企てた目標であった。その哲学では、人生の義務は、人生の幸福と完成の単なる手段として扱われていた。ところが、自然哲学ばかりか道德哲学も神学に従属するものとしてしか教えられなくなると、人生の義務は、主として来世の幸福の単なる手段として扱われるようになった。古代の哲学は、徳の完成はそれを身につけた人に現世において最も完全な幸福を必然的にもたらすものだ、と主張した。近代の哲学は、徳の完成は、大体、いやむしろ殆んどいつでも、たとえそれがどんなにささやかなものであっても現世の幸福とは相容れないものだ」と主張したのであって、天国は、懺悔と禁欲、修道院の耐乏と神に対する卑下によつてのみ、勝ち得られるものであり、人間の自由で寛大な、活力に満ちた行動によつてではなかった。⁽⁶⁾」すなわち

スミスのいう哲学は、人間の、個人として、家族・国家・人類の一員としての、幸福を探究する学問であって、教会の説くあの世のためにこの世の幸福を否定するものではなかった。

スミスにあつては、大学もローマ教会によつて設立され、教会と神学に奉仕するものであつた。「ヨーロッパの今の大学は、その大半がもともとはキリスト教会の団体であつて、聖職者教育のために設けられたものであつた。これらの大学は、法王の權威によつて創立され、完全に法王の直接の保護のもとにあつたから、教師であれ学生であれ、大学の成員みんなが、その当時のいわゆる僧侶の特権をもつていた。……こういう大学の大部分で教えられていたことは、設立の目的にかなうもの、すなわち神学か、さもなければ神学の準備にすぎぬものか、のどちらかであつた。」⁽⁷⁾

さて、古代ギリシャの哲学体系に自らの思想体系の拠り所を求めたスミスにあつては、この世における人間の幸福が最も重要なのだと考えたとしても何ら不思議ではない。彼にとつて、人間の幸福の基礎は生存つまり生きると言うことにあつたし、それが人間の本能でもあつた。スミスは言う。「自己保存と種の増殖は、自然が、すべての動物の形成にあたつて意図したように思われる、大目的なのである。人類は、それらの目的についての欲望と、その反対物への嫌惡を与えられている」⁽⁸⁾と。スミスが生存と本能を、来世の幸福よりも重視したのは、彼がルネサンス・ヒューマニズムの後継者だったからであり、彼の古代ギリシャへの尊敬も、人間の本来の姿を古代ギリシャの中に見たヒューマニストの態度と共通のものをもつていた。⁽⁹⁾だが当時のローマ教会という独占団体は、人類、民衆の幸福をもたらずどころか、不幸をもたらず存在でしかなかった。宗教の重圧から民衆、人類を解放すること、これがスミスの課題でもあつたのだ。

またもう一つ、先述のようにスミスの重商主義批判の背後には、植民地の原住民への弾圧と殺戮は勿論のこと、

ローマ教会という一大教会権力に先導された拝金主義への批判が横たわっていることを忘れてはならない。その証拠に『国富論』の締めくくりは、次のような文章になっている。「いまこそ、わが支配者たちは、国民ばかりか、どうやら自らも耽つてきたこの黄金の夢を実現してみせるか、それができないなら、率先してこの夢から醒め、国民を覚醒させるよう努めるかすべき時である。」^⑩ここで言う黄金の夢とは、イエズス会のグミラなどが夢みた黄金の理想郷エルドラードのことであり、カトリックの宗教政策として、海外植民地より聖なる黄金をヨーロッパに運び込むことを指している。

- (1) WN, II, PP.802-3. 邦訳、Ⅲ、一八二頁。
- (2) とりあえず、中川洋一郎『ヨーロッパ《普遍》文明の世界制覇…鉄砲と十字架』、学文社、二〇〇三年。清水馨八郎『侵略の世界史』、祥伝社、平成一三年、を参照されたい。
- (3) 田村正勝『社会科学原論講義』、早稲田大学出版部、二〇〇七年、九五―八頁参照。
- (4) WN, II, P.770. 邦訳、Ⅲ、一二七頁。
- (5) WN, II, P.788. 邦訳、Ⅲ、一五四頁。
- (6) WN, II, P.771. 邦訳、Ⅲ、一二八―九頁。
- (7) WN, II, P.765. 邦訳、Ⅲ、一二―二頁。
- (8) TMS, P.77. 邦訳、一二〇頁。
- (9) 水田洋、前掲書、一八五頁。
- (10) WN, II, P.947. 邦訳、Ⅲ、四三九頁。